

登山・登攀の記録

北アルプス 穂高 積雪期屏風岩第1ルンゼ

日時:1962年4月1日～4月2日

メンバー:CL 高田直樹OB 関田和雄

概要: 氷雪の屏風岩第1ルンゼが初めて登られたのは昭和17年3月の事であった。新村、梶本両氏は38時間の苦闘の末にこれを登った。その後屏風岩には東壁、中央壁、中央カンテ等の新ルートが開け相次いでその積雪期の登攀がなしとげられた。現在では積雪期に屏風に登るパーティは十指に余るにぎわいである。

このような状態の中にあつて独り第1ルンゼのみは、昭和23年3月の小泉氏パーティの試登を除いて取付くものなく初登以来20年間の静寂を保っているのであつた。この理由として第1ルンゼは他のルートと異なり、絶え間ない雪崩、落石、積雪不安定、あるいは氷化、または登攀中条件が悪化した場合これを切り抜ける事が著しく困難となる事等があつて登攀を阻んでいたのではないかと思われる。

しかし当時に較べ装備等の進歩もめざましく、また当時考えられもしなかつたような所にルートが開けている現状である。第1ルンゼたりとも例外ではない。1日で登り切る事も可能であろう。不遜にも私達は第1ルンゼの伝説を破ろうとしたのである。

記録

4月1日 快晴

3:00 高田、関田、林の3名は横尾小屋を出た。第1ルンゼ下のブッシュ帯でツェルトをはって夜明けを待った。激しい不安と焦燥の幾日かを過ぎて、私達は今はもう、ある透明の心境であつた。ウトウトとまどろんでいると、やがて東の空は明るくなり月は光を失った。ここまでサポートしてくれた林から、ザイル、鉄類等を受けとり身仕度をした。見あげる岩壁は静かそのものだった。取付まで200mを大急ぎで登った。5:30 先ず関田トップで登攀開始。ルンゼ左端に沿って登る。セカンドは幾つもの氷塊を頭にくらい、ヘルメットの有難さを知った。次のピッチは高田、ルンゼ左側の雪側をキックステップでグイグイ登る。シャフトでビレー②。次いで左上し草付の岩をダケカンバにシュリングをかけて吊り上げようとするがどうもうまくゆかない。この時一発目の雪崩が出た。見上げると奥壁上部はバラ色に染まっている。「おい、急げよ。」しかし、ここは雪崩に叩かれる心配はない。

私達はこの登攀のポイントをスピードに置いていた。ルンゼ内での天候悪化は致命的であつたから好天と好条件をつかんで一挙に登りきることが最もよい方法であり、ビバークするとしても奥壁にとりついてからでないといふ進退極まる事にもなりか

ねないと考えたからである。従つて中段台地までのスピードによって先ず登攀の成否が決まる。ここで断念した時は小泉氏のルートを取つて梓川に見える尾根にエスケープする。

関田腕力を消耗して下りる。高田替わつてアタック。細いブッシュをたよりに強引に攀じ登りダケカンでビレー④。ここは第1ルンゼの滝と左側の小ルンゼの間の岩壁で右上の垂壁に連打されたハーケンが見える。関田この約7mの垂壁で苦勞する。早く登らないと1日で登り切る可能性はうすれるばかりだ。高田は下でイライラしている。雪崩は右手の滝を間断なく落ちる。二回吊り上げアブミを一つ架けてのりきろうとするが、この垂壁の上は薄い蒼氷に覆われてカッティングするとスラブが現れる。しかしこれを越さねばどうにもならない。2、3回やり直した後、彼の姿は上に消えた。ザイルはなかなか延びず氷や雪が猛烈に降つて来る。ジッヘルよしの声でセカンド登り出す。このピッチすごく難しい。垂壁を必死に乗り切るとあとはノッペリした約20mのスラブが続き約1cmのベルグラがこれを覆っている。ホールドが皆無でカットされたステップにはツアック1本が乗るのみだ⑤。このピッチを3貫の荷を持ちハーケンも打たずに突破した関田のテクニックと果敢さに驚いた。

登山・登攀の記録

後で聞くとハーケンなんか打つ余裕はなかったという事である⑤。後はブッシュ帯で不安定なザラメ雪なので殆んどブッシュをたよりに攀じ登る。3ピッチでルンゼ底へのトラバース点へ来た⑧。8時30分。よし行けるぞ。私達はここでゆっくり休息しこれからのルートを検討した。

『ここから仰ぎ見る上部は私達を一驚させた。夏、比較的緩傾斜の岩盤(200m 約 45 度百丈岩の岩壁に似る。)が 50~60 度、300mのノッペリした氷壁と化し中央に雪崩の条溝が2本滝の落口へ蒼氷の垂線を描き、さらに奥壁は複雑な氷壁となって並立していた。偵察の時白い斜面を見てラッセルをさえ予想した誤算の大きさ、谷心へ一歩も踏み出せない。』初登の記録には以上の如く記されている。

奥壁からは絶えまなく岩屑の混じった雪崩が落ち、低い響きを立ててルンゼ底の雪崩のトレイルをドクドクと走り、やがて滝に消え去るとともに大音響をたてた。ルンゼ左側の側壁から落下するものが最も頻繁で、これは落下すると同時に堅雪に刻まれた8本のトレイルに吸込まれ、ルンゼ中心で一本に合流していた。このルンゼ底の雪崩の流れに盛衰はあったが、全く途絶える事はなかった。東壁上部からは10分おき位に落ちた。ダーンという音がしてやがてザーッとルンゼ滝の右岩壁に白いとばりが掛かり、まわりにきれいな虹ができた。壮絶というか凄惨と言おうか、あるいはそんな言葉では表現できない素晴らしい光景であり雪崩のシンフォニーだった。

ここから見る第1ルンゼは丁度立てたスプーンのような感じで急激に傾斜を増して突上げ枝分れして奥壁に消えていた。絶え間なく流れる雪崩を見てはルンゼ底へ入る気がしない。それに確実なビレーもできないのでルンゼ左端にある露岩やブッシュをたよりにルートを取る事にした。

紅茶をすすって出発。このあたりは一日陽が射さずラッセルがあり深い所では腰位まで潜る。ルンゼ中心寄りあまり潜らないのでなるべく谷心寄りを登り、ビレーする時は端に寄る事にした。適当な場所にブッシュや岩が出ているのでビレーはしっ

かりできた。

ルンゼの左側側壁の警戒すべきラビーネンツークは一つであって午前中にこれを横切る事は間断なき雪崩のため非常な危険を伴うであろうが、昼前にはこの雪崩はしずまり5、6分間隔になる事がプリズムによる偵察で分っていた。そこで時間待ちのためゆっくり登った。ビレーのハーケンに赤旗を結びつけたりしていると関田はおもむろにヤヅケの胸からマジックインキを取り出し落書をしたりした。ルンゼ底の中心線をこえて入って来ていた陽光が東壁の左へと後退をはじめ奥壁が太陽の叱咤から解放される頃、丁度私達は問題の8本の雪崩のトレイルの横断点へ来た⑩。一定の間隔をおいて落ちる落石の合間を見て大急ぎで渡る⑩。ここは初登パーティが取付いた裏屏風との境界尾根から派生する尾根の末端である。彼等より5時間は早い。今日はシュラフで眠れるなあと話し合った。予定通りさらにルンゼを登る。シャフトがよく効くのでツァッケを効かせて1ピッチ登り岩壁との接点を切開いて腰をおろし。ソーセージ、チーズを食レモンをかじる⑩。(12:50~13:10)。さらに2ピッチで取付く予定をした氷滝の下に来た⑩。(14:00)氷滝は約8mあり、最初の4mは垂直である。氷が少ないのは意外。ルートはこのルンゼ左の尾根(第2ルンゼとの境界尾根につきあげる)にと心積りであるが、この尾根の末端がいやな感じの岩なのでこの滝を登った後に左上し、ゆるやかなブッシュ帯を伝ってこの尾根に取付こうとしたのである。下からの偵察では第2ルンゼとの境界尾根に出ている巨大な雪庇が乗切れそうなのはこの尾根のジャンクションのみだからである。

高田氷滝にアイスハーケンを打つが気温が高く、氷が甘くてよく効かない。右側の岩を登って滝の中段に出ようとしたが岩は非常に脆く落ちそうになったので退却。落ち着いて観察する。このように氷が甘くては氷にルートを採るのは危険だ。右岸壁のはるか上のルンゼに張り出てダケカンバが見える。よし右の岩を登ってダケカンバをピンに滝の上部へアップザイレンするのだ。それより手はない。

登山・登攀の記録

高田猛然とアタック。ハーケン1本叩き込んで約4mの脆い岩を登ると幅10cm位のバンドがありホツとする。前には14mのスペースの岩が巨大な柱の如く突っ立っている。この上はテラスらしい。右をまいてこのテラスに立てば良いのだ。右は70度10mの細かなブッシュの生えたスラブ。さらに約4mの垂壁が続く。これを登るしかない。高田このスラブのマッチのようなブッシュを束ねて持ち、必死に身を支える。ホールドスタンス皆無。アイゼンはカリカリと鳴り、同じ姿勢で止まっていることはスリップを意味した。手足に起るミシンを堪えながら迫り上げられるように登った。約8mで右端の雪稜に出てこれを登り垂壁の下で雪稜を股に挟んで座り、ジツヘル⑩。関田ザイルにすがって登ってくる。腕は鉛のように重く、ともすればザイルが流れそうになる。

関田次いで4mの垂壁にアタック。何度も頭上のブッシュを掴もうとするが少しの所で手が届かない。右の脛あたりにある細いブッシュに乗り左へ大きく身体を傾けて頭上のブッシュを掴んだ瞬間スリップ。関田は左腕一本で木に吊り下がってしまった。そして激しく悲鳴をあげた。「タカダはん、タスケテ！ タスケテ！」次の瞬間彼の身体は大きく一回転して8mの空間を飛んだ。「どもないか！」「大丈夫、どうもありません。」と元気な声がかかる。

「ムカツクなあ。馬鹿にしよって、とうとう俺を放り出しやがって」関田、上を睨んでしきりに罵っている。今度は空身で右に約4mトラバースして取付く。高田はセルフビレーのピンが得られない為腰を雪に埋めてジツヘルしていること1時間以上、寒さのために歯の根が合わない。これが乗切れなければ進退極まるのだ。ガンバレ！俺は手が駄目で寒くてコチコチでとてもトップはやれそうにない。頑張ってくれと話しながら祈るような気持ちでトップを見つめている。関田は先ずシュリングでランニングビレーし、胸位の高さのブッシュに乗ると後は草付にスタンスをカットし、何度も何度もやり直しに後、頬をこすりつけるようにしてこの壁を越した。ホツとしたのは束の間、テラスと思ったのは大きな誤算で約70度も傾斜した偽テラスだった。

ビレイピンを探すが適当なブッシュなく、リスもない。岩盤についた堅雪にステップを切り左に約4mトラバースし滝上への下り口を探すが、下から見ていたダケカンバは7mも下で、そこまで下降する事はランニングビレーが出来ない以上極めて危険であった。この偽テラスに魚の背状に張付いた雪のリッジを切ると細いブッシュが現われ、さらに掘ると腕ほどもないがかなり太いブッシュが現われた。これでアップザイルのピンが得られたので安心する。ここでジツヘル⑩。高田ザックを2つ持ち登る。身体は完全に冷え切り下半身の感覚は無くなっていた。ザックで身体が後に引かれる。「ザイル引いて！」「モット、モット。」けれども関田も腕力の消耗激しく、手に力入れられずザイルはズルズルと流れる。高田必死でホールドにしがみつけば手首に激しい痙攣が起る。ブッシュにしがみついで手を休めた。ようやく上に出てトラバース開始。手はザックに締付けられて殆んどしびれ、無理に力を入れると痙攣が起る。このわずか4mのトラバースは最も沈痛な思い出である。時計を見ると6時。わずか30mの2ピッチに4時間も費した事になる。ここでビバークと決定。足元のサラサラの雪を慎重にふみ固めると1m平方にも満たないビバークブラツが出来上った。

足下の横尾の河原には夕靄が立ちこめ、あたりは既に薄暗かった。四囲の岸壁は威圧的にのしかかり、大きくまき出た大雪庇が今にも崩落しそうに睨んでいた。私達はこの孤立無援の場にあつて激しい不安と孤独を感じた。しかしこれは私達が自ら欲して行なっている事だし、私達はお互いに1人ぼっちでは無かったのだ。

ツェルトを被るとすぐアルコールバーナーがシューと音を立てはじめ、美味しいおじやが出来上った。コールが聞えるのでツェルトをめくると股の間でライトが点滅している。林が下から信号を送って元気付けてくれているのだ。応答する。後は眠ればよい。ウイスキーを飲んでよく眠った。眠が覚めると色々なものを片っ端から食べたが、いつものように面白い話をするような気分にもなれなかった。4月2日

登山・登攀の記録

ツェルトの色が鮮やかになって夜が明けそめた。うれしや、まだ晴天が続いている。しかし今日一日は持つまい。移動高によって一昨日より晴れ出したが、その後から 990 ミリバル台の大きな低気圧が続いている事は知っていた。

6時行動開始。9mmテトロンザイルのドッペルの1本をはずし、関田これでルンゼ底へ約7mのアズプザイン。次いで尾根の側壁にある1本のダケカンに向って約8mルンゼをトラバース。突然このルンゼのつめの岩壁より数発の落石があり肝を冷やす。はや陽が当り始めたのだ。このルンゼの雪は全くの粉雪である。アイゼンはガリガリ、シュピッツェはガチガチと音を立てる。関田、悲鳴をあげてトラバース完了。ダケカンでがっちりビレー^㉓。次のピッチは70~80度の雪壁で、ブッシュを掘出しながら登り尾根上に出る^㉔。続く2ピッチは太いダケカンの幹を伝った。ここでこの尾根は右に傾いた岩壁となっていた。関田この脆い岩を登り 30m いっばいでリッジに出る^㉕。境界尾根は目前である。高田この薄いリッジを登ると、張出した雪庇に前を塞がれた。雪庇の腹からブッシュを掘り出し、これを頼りに身をのけぞらせて約3m右にトラバース。雪庇が切れている。左手でブッシュにぶらさがり大きく右手を振上げてシャフトを刺す。サクッ！ ああ遠く忘れていたようなこのシャフトの手応え。一気に乗切って境界尾根の緩やかな雪面に出た^㉖。「ヨーシ。上って来い」高田は大声を上げた。9:40。28時間30分、28ピッチの登攀は終わった。

薄雲が拡がり始めた空の下を私達はアンザインしたままゆっくりと横尾谷を下って行った。岩小屋の前で屏風を見上げるとルンゼのトレイルが鮮やかに映った。私達のトレイルだとは信じられないような気がした。

夕刻より雨となり翌日も一日降り続いた。私達は小屋で薪を割りながら、ひっきりなしに小屋を揺るがす雪崩の音がするたびに顔を見合わせた。

私達はテトロンザイル(9mm)、グリーベル軽量アイゼン(10本爪)等最高の装備を持って、第1ルンゼの1日完登を目指したが、奥壁で意外にてこ

ずり、遂に果せなかった。しかし第1ルンゼの20年間の眠りを破ったこと、奥壁へ抜けるルート如初トレース(初登ルートは梓川の見える尾根に上っており、奥壁とはいい難いと思う。)したことに意味があると思っている。第1ルンゼは恐ろしくて近よれないと考えられていた傾向もあるが、雪崩に気をつけ、ルートと登攀のタイミングをさえ考慮するならば、決してそんな所ではない。第1ルンゼの伝説は破れた。条件に恵まれた優れたクライマーが1日完登を成遂げるのは時間の問題であろう。(記/高田直樹)

- ⑧—⑩ 急な雪面をラッセル、深い処は腰まで。
- ⑪ ここに赤布をつけたアイス・ハーケンを岩にたたき込む。
- ⑳—㉒ 最も時間を要した部分、脆い岩の積重ねのようで不安定。
- ㉒ ビバーク地点
- ㉒—㉓ トラバース雪悪し、落石多し。
- ㉓—㉔ 太い岳樺の間をラッセル
- ㉔—㉖ 脆い岩のナイフリッジに雪が被っている。

